

隣人愛をめぐるニーチエの思想

北 岡 崇

はじめに

隣人愛の掟は、イエスによれば、神への愛の掟と同様の重要性をもつ掟である。イエスは、これら二つの掟について、「律法全体と預言者は、この二つの掟にもとづいている」¹⁾と述べ、また「この二つにまさる掟はほかにない」²⁾とも述べている。しかし、「律法全体と預言者」の根底を語りそれゆえまたバイブルの知恵すなわち人間にたいする神からの音信の根底を語るとされるその隣人愛の掟に、ニーチエは独特の解釈をほどこし、その掟の意味を解体し変容させようとしている。こうして、ニーチエの思考とバイブルの知恵が、隣人愛の掟の意味をめぐる激しく衝突することになる。本稿は、ニーチエの隣人愛批判——同時代人の言う隣人愛にたいするものからバイブルの語る隣人愛にたいするものまで——を明らかにしながら、バイブルの思想との対比のもとにニーチエの思考の特質を探ろうとするものである。

隣人愛批判

隣人愛を実践すると称するみずからの同時代人を観察するニーチエは、彼らの実践とその実践にともなう思想をどのように捉えていたのだろうか？ まずはじめに、ニーチエの主著『ツァラトゥストラ』³⁾第一部に所収の「隣人への愛」と題する章より、登場人物ツァラトゥストラの次の言葉を引用したい。

「あなたがたは隣人のまわりにむらがり、それをさも美しいことのように言う。しかし私はあなたがたに言う。あなたがたの言う隣人愛とは、あなたがた自身へのあなたがたの愛がうまくゆかないということなのだ。あなたがたはあなたがた自身を避け隣人のもとへ逃げだしておきながら、そのことを自分の美德にしたいと思っている。しかし、私はあなたがたの〈無私〉を見抜いている。〈あなたがた〉は〈私〉より古い。〈あなたがた〉は神聖なものと宣言されているが、〈私〉はまだ聖化されていない。だから人間は隣人のもとに押しかけてゆくのだ。私はあなたがたに隣人への愛を勧めるだろうか？ いや、むしろ私はあなたがたに隣人からの逃走と遠人への愛を勧める！

隣人への愛よりも、遠人への愛、来たるべき人への愛のほうが高い。……あなたがたはあなたがた自身にがまんができないし、自身を十分に愛してもいない。そこであなたがたは隣人を愛へと誘惑し、隣人の錯誤によって自分に鍍金(めっき)をかけようとするのだ⁽⁵⁾。

ツアラトウストラの批評は辛辣だ。彼の言葉の鋒先は、隣人愛の実践なるものにおいておそくはみずから有徳であることにひそかな誇りを抱き満足さえ得ている同時代人の、まさしくその誇りと満足にむけられている。ツアラトウストラによれば、彼らの誇りと満足は、充実した美德とその力を自己自身のうちに意識するところから生じるものではない。彼らの言う隣人愛は、「奔流のようにみながり、あふれ、波打つ⁽⁶⁾」心情に由来するものではない。「ありあまる力から生まれる或る衝迫⁽⁷⁾」が彼らを実践に駆り立てるのでもなく、それゆえ、彼らの言う隣人愛の実践には、「充実の感情、今にもあふれようとする力の感情、高くはりつめた緊張のもつ幸福、贈りまた与えたいと思う富の意識⁽⁸⁾」はともなっていない。逆に、彼らの心情は貧弱で、その裸身はやせおとろえていて、彼ら自身もそのような自分たちのありさまに「がまんができない」。だからといって彼らは、そのような自分たちのありさまを深く憎み、「遠人への愛、来たるべき人への愛」に生きようとしめない。彼らは「大いなる軽蔑者⁽⁹⁾」として生きること「大いなる尊敬者⁽¹⁰⁾」つまり「彼方の岸へのあこがれの矢⁽¹¹⁾」として生きることできない。彼らの場合、軽蔑もあこがれも、ともに「貧弱にして不潔、そしてみじめな安逸⁽¹²⁾」である。そこで彼らは、「がまんができない」自己自身に「鍍金」をかけてくれる他人を求めて隣人のもとに押しかけてゆくのだ、とツアラトウストラは語る。それゆえ、彼らが実践すると言う隣人愛は、ツアラトウストラによれば、彼らが貧弱でやせた自己自身を温

存しつ⁽¹³⁾つ何とか自己満足を得ようとする際の方便に墮している⁽¹⁴⁾。つまり彼らは、無私なる愛の動機からするおこないという体裁をもつ働きかけを隣人におこなうことによって隣人をあざむき、その「隣人の錯誤」を介してその隣人から自己自身にたいするよい評価を獲得し、そのよい評価という「鍍金」で、貧弱でやせた自己自身の姿をおおい隠すと同時に飾り立て、自分の目に自分をがまんのできるものとして映じさせたいのだ。こうして、彼らが自己自身の目をもあざむき、自分も捨てたものではない、まんざらでもない自己自身に思い込ませることに成功すると、彼らはやつとひそかな誇りと満足を抱くことのできる心境になれるというわけなのだ。それゆえ、ツアラトウストラは語るのである……。「あなたがたは自分のことをよく言いたいと思うときには、自分のためにその証人になつてくれる者を招いてくる。そして、この証人を誘惑してあなたがたのことをよく思わせることに成功すると、あなたがた自身が自分のことをよく思うようになる。自分の知に背いて語る者だけが嘘つきなのではない。自分の無知に背いて語る者こそ、それ以上に嘘つきなのだ。まさにそのように、隣人との交際であなたがたは自分のことを語り、自分をも隣人をもあざむいているのだ⁽¹⁵⁾」と。

ツアラトウストラの言葉は鋭くかつ適確である。現代の人間ほどではないにせよ、雑草のようににはびこる我欲やその我欲と共存しそれに奉仕するさまざまな文化活動のために、バイブルの知恵を表現する語のなかでもっとも基本的なクラスに属する隣人愛という語の意味にたいしてさえずる鈍感になっている近代の人間——ニーチェの同時代人——がその語に与えた意味を、ツアラトウストラは適確に描き出している⁽¹⁶⁾。バイブルの思想にたいする感受性を失ってしまった、しかしそのことに気づいていない名ばかりの信仰者たち

の心情をむしろ欺瞞を鋭くえぐり出す言葉である。

しかし、ニーチェがみずからの同時代人である名ばかりの信仰者たちの言う隣人愛の欺瞞性を暴露したからといって、ニーチェのその批判がただちにバイブルの知恵の根底に位置する隣人愛の掟の思想にも適中するとはかぎるまい。他人からよい評価を得るための機会を利用することにかけては抜け目ないが、しかしみずからの信仰の内実にたいしては盲目で鈍感な名ばかりの信仰者たちが理解する隣人愛は、バイブルに実践するよう勧められている隣人愛とはまったく異なるものであるからだ。ともあれ、事情を明らかにするため、隣人愛を命じるバイブルの言葉に耳を傾けよう。

隣人愛の掟

バイブルから、隣人愛を命じる言葉をいくつか引用しよう。

「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。私は主である」(『レビ記』)。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」(『マタイによる福音書』)。

「人を愛する者は、律法をまっとうしているのです。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。愛は隣人に悪をおこないません。だから、愛は律法をまっとうするものです」(『ローマの信徒への手紙』)。

隣人愛を命じるこれらすべての言葉は、隣人を自分のように愛するようにと述べている。²²⁾パウロはまた、妻帯者にとって特に近しい隣人であるその妻のことで、「……夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです」²³⁾と述べているが、この言葉にも隣人を自分のように愛することを命じる隣人愛の掟が生きていると言えるだろう。また、『マタイによる福音書』、山上の説教の次の一節にも、自己と他者を「わけへだてなく」愛することを命じる隣人愛の掟の生きていることが明らかである。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」。²⁵⁾

したがって、バイブルによれば、自己への愛を知っている者だけが隣人愛を実践できる。自己を愛することができないのであれば、その人は隣人を愛することもできない。それゆえ、自己を十分に愛することができず自己自身に退屈しうんざりし自己をもてあましている人間の自己からの逃避、自己に「がまんができない」という自己の状況を直視することから自己をまぬがれさせてくれる実践、つまり気晴らし暇つぶし、あるいはせいぜいそれをいくらか美的に表現したものとしての趣味のようなものであるなら、たとえこれらが他者からのよい評価をどれほど約束するものであるにせよ、そのような実践を、バイブルは決して勧めてはいない。それゆえ、みずから隣人愛を実践すると称する同時代人を観察し、彼らの実践の意味を彼らが意識している以上に、また彼らが意識している意味とは異なるものとして暴き出すニーチェの批判が適確であればあるほどなおさらのこと、その批判はそれだけでは、その射程内に、バイブルの語る隣人愛の掟の思想をおさめてはいないということになる。くりかえしになるが、バイブルに記された隣人愛の掟とは、隣人を自

分⁽²⁹⁾の、ように愛することを命じるものだからである。それどころか、ニーチェの批判が適確であると言える状況において、バイブルの知恵の導きに生活を全面的に委ねるような信仰の人々がまだいるとすれば、そのような人々は、ニーチェが批判する人々をやはりニーチェと同じように批判——とはいえニーチェのように彼らを悪しざまに言うことはないだろうが——しつつ、隣人愛の掟にたいする彼らの誤解を捨てさせその掟の意味を説きその実践を忍耐強く勧めることであろう。ニーチェも、バイブルの知恵の導きに生活の全体を委ねようとする信仰の人々も、名ばかりの信仰者たちにたいして、彼らとのかかわり方に差があるとはいえ、ともに批判的な態度をもつてかわるということにおいては同じである。彼ら名ばかりの信仰者たちは、ニーチェからも、バイブルの知恵に絶対的な信頼を寄せる信仰の人々からも等しく遠く離れた存在なのだ。だからといって、ニーチェの思考がバイブルの知恵と衝突することには少しも変わりはない。⁽²⁶⁾ニーチェは、同時代人への批判を越えてさらにバイブルの思想そのものにまで攻撃の手をのばそうとする。だが、今はまず、バイブルにおいて隣人愛の掟が語られるコンテクストを見ておく。

バイブルによれば、大地ならびに大地に所属するものは神に創造されたものとして元来よいものであった。⁽²⁷⁾そして、サタンと最初の人間夫婦アダムとエバを介して罪と悪が世界に入った後も、大地ならびに大地に所属するものは、すべて神による被造物として依然としてそれぞれの仕方⁽²⁸⁾で神の栄光を表現している。たとえば、『詩篇』に記された詩の一節でダビデは次のように語っている。「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、

その響きは全地に、その言葉は世界の果てにむかう」⁽²⁹⁾。またパウロも、『ローマの信徒への手紙』に記している……。「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物にあらわれており、これを通して神を知ることができます」⁽³⁰⁾。それぞれの仕方⁽³¹⁾で創造主なる神の栄光を表現する被造物のなかでも特に人間は、創造主である神のかたちにかたどられ造られたものとして、もつともよく神の栄光を表現する被造物である。バイブルは、各々の人間に、その存在の全体が神からの贈り物であること、しかも神のかたちにかたどられ造られていることを自覚させ、その自覚をもつて各々が神の栄光をみずから進んで讃美しつつ生活するようにと勧める。⁽³²⁾そのような生活においてのみ人間は、万物を創造した神の意図と合致して人間として享受できる最高の幸福を得ることができると言うのである。

隣人愛の掟が隣人を自分のように、つまり自己と他者を「わけへだてなく」愛するようにと命じるとき、この命令も、自己と他者とともに神のかたちにかたどられた存在として、またともに神の栄光をみずから進んで讃えつつ幸福な生活を享受するようにと神によって招かれている存在として捉える捉え方と整合するコンテクストにおいて、なされている。それゆえ、隣人愛の掟は、隣人を自分のように愛せよと命じるが、これは決して自分に媚びるものでもエゴイズムの一般化を推進しようとするものでもない。このことは、愛が何をなし何をなさないかを語るパウロの次の言葉からも明らかである。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」⁽³³⁾。神への愛の掟と同様の重

要性をもつ隣人愛の掟が、隣人を自分のように愛せよと命じるとき、その愛にすでに一定の規準が存するのであり、目の欲望や肉の欲望や虚栄心に支配された自己を中心に据えて他者とかかわろうとする態度は、その掟によつてはじめから排されているのだ。

さらにまた、バイブルには、「わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえつて、……わが身を養ひ、いたわるものです」と記されている。すなわち、隣人愛の掟とは、「わが身」への愛、自己の全体にたいする愛を、誰もがすでにあたりまえのこととして実践しているとする前提したうえで、さらに隣人を自分のように愛せよと命じるのである。だが、誰もが「わが身を養ひ、いたわる」とはいえ、「わが身を養ひ、いたわる」人、つまり「わが身」を愛する人がすべて、自己自身が神のかたちにかたどられ造られた神からの贈り物であると意識したうえでその身を愛しているわけではない。だからこそバイブルは、自己への愛をあたりまえのこととして各人がすでに実践していると言いつつも、同時にその自己への愛を神への愛と調和するかたちにおいて自覚的に成長させてゆくように勧めるのであり、さらに、隣人愛の掟において、神への愛と調和するかたちで自己を愛する際のそのような愛をもって、自己と同じように神のかたちにかたどられた他の人間にかかわるようにと命じているのである。

もちろんニーチェも、右に述べたようなバイブルの思想を承知している。同時代人にたいする批判にあたつて、先のツァラトゥストラの言葉だけではバイブルに記された隣人愛の掟の思想にたいする批判としては不十分であることを、ニーチェは承知している。たしかにニーチェは、先のツァラトゥストラの言葉、とりわけ「遠人への愛」の勧めにおいて、バイブルの語る隣人愛の掟の思想にたいする正面きつての批判をすでに開始しているのであるが、その批判を

十分になしえているなどという思い込みには決して陥っていない。ニーチェは批判すべき思想の内実、その深さと高さをそれほど小さなものであるとは考えていない。先のツァラトゥストラの言葉はただそれだけでは、同時代の名ばかりの信仰者たちにたいするその批判的態度という点において、かえつて、バイブルの語る隣人愛の掟に服従しようとする信仰の人々との近接を示すことになりかねないということ、ニーチェは知っている。彼は、バイブルの語る隣人愛の掟には、神への愛と調和するかたちで自己への愛をもつものだけがその愛に応じて隣人への愛を実践することができるという思想の含意されていることを知っているからこそ、『ツァラトゥストラ』第三部に所収の「小さくする美德」と題する章のなかで、ツァラトゥストラに次のように語らせるのである。「あなたがた小さな有徳の人々よ、あなたがたは奪うときにも、その手口はまるでこそ泥のようだ。……『あなたがた自身と同じようにあなたがたの隣人を愛するのでもいいだろう、——だが、何よりもまず、自分自身を愛する者となつてくれ——大いなる愛をもつて愛する者、大いなる軽蔑をもつて愛する者となつてくれ！』神を無みする者ツァラトゥストラはこのように語る」。

ニーチェの同時代人も、口先では、自分たちは隣人を自分のように愛するのだと言うのだろう。だが、ニーチェは、バイブルの語る隣人愛の実践に先立ち、隣人愛を実践するためにも不可欠な自己への愛をまず勧める。「何よりもまず、自分自身を愛する者となつてくれ」とツァラトゥストラは語る。これにたいして、彼らニーチェの同時代人は、自己への愛はごく自然のものであるというバイブルの思想に同意したうえでみずから隣人愛を実践しているのだと応じるにちがいない。しかし、バイブルがあたりまえのこととして掟え

る自己への愛が、ニーチェによれば、実は決してあたりまえのことではない。「自分を愛することを学ぶ」ということ、これはまことに今日明日に果たせることではない。むしろこれこそ、あらゆる技芸のなかでもっとも精妙な、手のこんだ、究極の、もっとも忍耐を要する技芸なのだ。なぜなら、本当の自分のものはすべて、自分の手がたやすく届かぬように、巧みに隠されているからである」⁴⁰。

自己への愛なら誰であれすでにあたりまえのこととして実践していると捉えるバイブルと、自己への愛を学ぶことこそ困難を極めることだとするニーチェと、これら二つの思想の差はどこから生じるのであろうか？——同時代人を批判するツァラトゥストラの言葉のなかで、「あなた」は〈私〉より古い。〈あなた〉は神聖なものと宣言されているが、〈私〉はまだ聖化されていない⁴¹と語られていた。だが、価値の唯一究極の根源としての神という観念を認めないニーチェは、もはや、〈あなた〉と言って神に呼びかけることをしない。神のかたちにかたどられているがゆえに被造物のなかでも特に高い価値をもつとする考え方を、もはやニーチェは、自己の存在、〈私〉という存在について認めてはいない。そして今、聖なる神をしりぞけその神のかわりに〈私〉を聖化すること、これこそ自己を愛することを学ぶということであり、ニーチェが困難を極める業であると考えたものである。

神の死という出来事

『ツァラトゥストラ』第一部が出版された年の前年、一八八二年に、『華やく知恵』初版が出版されている。そのなかに、「白昼に提燈をつけて」「広場」で神の死を告知する「気違いじみた男」を描出

する節がある。その男の語る言葉から次の箇所を引用しよう。

「おれたちが神を殺したのだ——諸君とおれが！ おれたちはみな神の殺害者だ！ だが、どのようにしておれたちはそんなことをやってのけた？ どのようにしておれたちは海を飲みほすことができた？ ……この地球をその太陽から切り離すようなことをおれたちはやってのけた？ 地球は今どっちへ動いてゆくのか？ おれたちはどっちへ動いてゆくのか？ すべての太陽から離れ去ってゆくのか？ おれたちは絶えず突進してゆくのではないか？ それも後方へか、側方へか、前方へか、四方八方へか？ 上方と下方がまだあるのか？ おれたちは無限の虚無のなかを迷ってゆくのではないか？ むなしい虚空がおれたちに息を吐きかけているのではないか？ 冷えてきたのではないか？ 絶えず夜が、ますます深い夜がやってくるのではないか？ 白昼に提燈をつけないければならぬのではないか？」⁴²。

大地を創造した神、みずからのかたちを刻印することによって人間に格別の価値を付与した神、さまざまな掟を介し人間にその生活の意味を自覚させその生活を導こうとする神、つまり人間ならびに人間を取り囲むすべての存在の価値と意味の根源としての神、バイブルの語るこのような神への信仰を失った人間の、しかもそのような信仰を失ったことをはつきりと自覚した人間の言葉である。なるほど、たしかに、バイブルには、みずからの日々の生活を全体的に神からの贈り物として享受しつつその生活の全体を通して神への感謝を表明しようと志向する信仰の人々のことが記されている。神のかたちにかたどられたその身一つをみずから進んで神の栄光を讃える場として用いようと努める人々、「私たちは生ける神の神殿なのです」⁴³という言葉を語る充実した信仰を有する人々のことが記され

ている。だが、ニーチェは、今や人々は、みずから進んで神の栄光を讃えることに、人間の生活の最高の価値、究極の意味が実現するのだとは考えていないということを見抜いている。人々が自己自身を「生ける神の神殿」として用いる日々の生活に人間として享受しうる最高の幸福の約束されていることにはや確信をもつことができなくなったということ、これこそ神の死という出来事である。この出来事の進行とともに、自己と他者ととともに神のかたちを宿す存在として等しく敬愛すべきことを説く隣人愛の掟も、その掟にみずから進んで服従するよう人々をひきつける力を失ってしまった。そして、今、近代の人間は事実上すでに神への信仰を失って完全に方向感覚を喪失している。ところが、もはや信じていない神の観念をまだ捨てきれない中途半端な信仰者たちは、「無限の虚無」のなかを抛りどころなくさまよい歩き右往左往するみずからのその彷徨を称して隣人愛と言う。「このような彷徨に洗礼がほどこされて（隣人への愛」と命名される。この言葉ぐらいこれまでに嘘と偽善のために役立った言葉はない」⁴⁶とツァラトゥストラは語っている。つまり、自己のうちに神のかたちという価値の刻印されていることを確信することも、その価値ないし偽価値をふり捨てることもできない近代の人間が、自己自身に「がまんができず」隣人のところにおもむき、さまざまな手管を弄して自分の値をつり上げようと試み、その試みに成功すればやつとしばらく落ち着くことができるというわけなのだ。それゆえニーチェは、ツァラトゥストラに語らせるのである……。「ある者は、自分をさがし求めているので、隣人のところへゆく。また他の者は、自分を失いたいと思って隣人のところへゆく。あなたがた自身へのあなたがたの愛がうまくゆかないために、孤独があなたがたには牢獄となっているのだ」⁴⁷、と。

神の死という出来事の進行とともに変質したのは隣人愛という美德の意味だけではない。たとえば、謙遜という美德についても、また世俗の「上に立つ權威」⁴⁸にたいする従順という美德についても、神の死という出来事の進行する時代に生きる彼らニーチェの同時代人のあいだでは、その意味が、バイブルの語る意味とは似ても似つかぬものへと変質してしまっている。元来、神ないし神の栄光を表現するものを前にしてわが身を屈するという意味での謙遜が、今では人間たちのあいだでわが身の安全と延命をはかるための方便、自己保存のための方便に化している。「踏みつけられた虫は身を縮める。とても利口なやり方だ。こうして虫はあらたに踏みつけられる確率を減らしているのだ。これを道德の言葉で言うなら、謙遜」⁴⁹とニーチェは記している。また、パウロは、「人はみな、上に立つ權威にしたがうべきです。神に由来しない權威はなく、今ある權威はすべて神によって立てられたものだからです。……自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい」⁵⁰と命じているが、この命令が彼らニーチェの同時代人、名ばかりの信仰者たちの鈍い心を通過すると、たとえば「官憲を敬い服従しなさい。たとえ曲がった官憲であつても！」⁵¹という勧告に変わる。「上に立つ權威」あるいはその命令の執行者が神の命令に敵対する「曲がった」ものであるなら、当然バイブルはそれへの服従を神への敵対と見なすであろうに。神への愛すなわち神の掟を守ろうとする意志は、彼らニーチェの同時代人の実践にはもう見られない。官憲に服従すること、「よい眠りにはそれが要だ。権力がともすれば曲がった脚で歩くのを、私にどうすることができようか？」⁵²というのが彼らの本音である。パウロの命令は「よい眠り」に誘う子守歌になつて

しまっているのだ。パウロは、「上に立つ權威」への従順を命じる右に引用した言葉の少し後で、「あなたがたが眠りから覚めるべき時がすでに来ています⁽⁵⁶⁾」と述べている。しかし、彼らニーチェの同時代人は、パウロのこの言葉が促す覚醒とは逆の「よい眠り」を得るための処方箋として、「上に立つ權威」への服従を説くのである。要するに、彼らの心を通過すると、隣人愛も謙遜も世俗の支配者への従順・服従も、かろうじて自己満足を抱きつつ小さく貧弱でみじめなものとして生きつづけてゆくための社交上の技術、保身のための知恵、あるいは自己自身の現実⁽⁵⁷⁾に覚めることのないような時をやりすぐすための方便に墮してしまふのである。彼らがそのような処生の知恵、方便に頼るかぎり、もちろん彼らはそれらにそれなりの価値を認めているのであろう。だが、自己ならびに自己を取り囲むさまざまな存在の価値と意味の根源を確信できず「無限の虚無」のなかを彷徨する人間にとって、根本的には、確たる価値と意味をもつものは何もない。たとえ、隣人愛なる実践によって隣人からのよい評価を獲得し高い値に評価されたとしても、結局のところ「およそ値段のつくものはすべて価値のないものである」⁽⁵⁷⁾。

「値段のつくもの」とはその「値段」を他者からはりつけられた品物である。その「値段」を決定するのはあくまでも他者であり、他者が「値段」をはりつけたその品物は、その「値段」をはりつける他者のもとのみそれだけの価値をもつものとして承認される。だが、「値段のつくもの」、品物は、その「値段」を付与されたものであるから、価値の根源としての価値、価値産出的なものとしての価値は決して所有しない。だがニーチェは、まさしくこの価値の根源、価値産出的なもの、評価しつつ創造する働きこそ価値をもつと云うのである。ツァラトゥストラの言葉に耳を傾けよう。「自己を

維持する必要上、人間が事物のなかに、はじめて価値をさし入れたのだ。——人間がはじめて事物の意味を、人間的な意味を創造したのだ！ だからこそ、人間はみずからを（人間（Mensch））と呼ぶのだ。すなわち評価する者（der Schätzende）と。評価すること（Schätzen）が、創造すること（Schaffen）なのである。よく聞きなさい。あなたがた、創造する者たちよ！ 評価することそれ自身が、すべて評価された事物の富であり宝である。評価によつてはじめて価値が生じる。評価することがなければ、存在の胡桃はうつろであらう⁽⁵⁸⁾。万物を創造する神が各々の被造物の価値を定め、神の啓示であるバイブルと、美と調和に満ちた自然とがその定められた価値を開示するというバイブルの思想を、ニーチェは拒絶する⁽⁵⁹⁾。価値と意味の根源としての神という他者をしりぞけ、ニーチェは、自己ならびに身のまわりのすべての存在を、神による価値づけ・意味づけのはぎとられたその裸形の姿において、つまり「無限の虚無」のなかに浮遊するものとして眺めている。そしてニーチェは、今、無価値で無意味な空間に浮遊する「うつろ」な「存在の胡桃」に、みずからの意志にもとづいて価値をさし入れ意味を付与し、こうして、みずから一つの意味世界を創造しようとしているのである。すなわち、大地の価値と意味の根源である神という觀念を排し、ニーチェは今、神の死を確認しつつ、万物にその光と熱を注ぎかける太陽のようにみずから大地にその意義を獲得させようとしているのである。「新しい力」、「新しい權利」、「第二運動」としての自己自身、価値と意味の根源としての自己自身のまわりに「星々を強いて回転させる」ことをめざしているのである。人間は、他者から「値段」をはりつけられたり価値づけされたり意味づけされたりするだけでなく、みずから評価し（schätzen）、その評価において一つの世界

を創造する (schaffen) からこそ、人間 (Mensch) であるのだ。⁽⁶¹⁾ それゆえ、「もはや意志しない、もはや評価しない、もはや創造しない」人間、「この大いなる倦怠」にとらえられた人間は、ニーチェによれば人間 (Mensch) の名に値しない。

バイブルでは、隣人愛の掟は、「自己」と他者とともに神のかたちという価値の刻印された存在として捉える捉え方と整合するコンテクストにおいて提示されていた。だが、ニーチェは今、神のかたちにかたどられた被造物すなわち人間という人間一般の捉え方にたいする信仰が事実上すでに失われていることを確認したうえで、何よりもまず自己自身のうちに——自己と他者のうちにでも人間一般のうちにでもなく——、新しい一つの意味連関をもつ価値の世界を創造する力、すなわち価値と意味の根源を探りあてようとしている。しかし、ニーチェの説く神の死という出来事は、「あまりにも大きすぎ、遠すぎ、多くの人々の把握力からあまりにも掛け離れて」いる。それゆえ、まさにその出来事の進行する時代に生きる人々のもとにさえ「その情報がどうやらやっと届いたとすら言いかねるほどである」⁽⁶²⁾。それゆえ、もはやみずからの生活の価値と意味の全体がバイブルの語る神に依存しているとは確信できず、隣人愛の掟の正当性の究極の根拠についてもあやふやになっているにもかかわらず、依然として形骸化した隣人愛の掟にこだわる同時代の信仰者たちのあいだにあつて、ニーチェは、到来しつつある時代の「初子にして早生児」⁽⁶³⁾として思考せざるをえないのである。今まさに到来しつつある一つの時代の真理を語る人間の言葉は、常に、その同時代人の耳には、まるで未来の人の語る言葉、未来からの声のように響くものだ。古びた観念や古びた言葉に呪縛され架空の現実のなかに生きる人々にとって、生まれつつある現実と格闘しそこでもがき思考する

人間の語る新しい言葉は常に預言者の言葉のように響くものだ。ニーチェは、ツァラトゥストラに「この民衆のあいだでは、私は私自身の前触れだ。暗い路地に響きわたる私自身の鶏鳴だ」⁽⁶⁴⁾と語らせるが、この言葉を語らせるのは、新しい時代の「初子にして早生児」として思考するというニーチェ自身の自負心にほかならない。ツァラトゥストラが「遠人への愛」、「来たるべき人への愛」を勧めるとき、その「遠人」あるいは「来たるべき人」という言葉も同様に理解されなければならない。「遠人」あるいは「来たるべき人」とは、今まさに生まれつつある現実のなかでその現実を思考し語りその現実に関与する人間が同時代人のねばけまなこに映じる姿のことであり、またまさしくその同じ現実を生きていながらその夢うつつの意識によつてはめつたに把握されることのない彼らニーチェの同時代人自身の存在のことなのである。

だが、隣人を自分のように愛せよという掟において語られている隣人あるいはまた自分という言葉にしても、その意味は、彼らニーチェの同時代人の意識にとつては、彼ら自身やニーチェないしツァラトゥストラと同じくらい遠い存在であるのだろうか。『使徒言行録』には、「実際、神は私たち一人一人から遠く離れてはおられません」というパウロの言葉が記されているが、自己と他者とともに宿る神性をもはや確信できなくなっている彼らニーチェの同時代人の耳には、このパウロの言葉は、バイブルに記された他の言葉と同様、日々の生活のなかでときたまにしか聞こえてこない遠い声、たとえ聞こえてきたとしてもその意味を聞きとることの困難な遠い声のような響きしかもたないのであらう。近代の人間の意識にとつては、ニーチェの思考もバイブルの知恵も、ニーチェがその思考において捉え語ろうとする新しい現実をまさしく生活する彼ら近代の人間自身の

存在と同様に、ともに遠くへたたっている。とはいえ、ニーチェの思考がバイブルの知恵と合致するというのはない。ニーチェは、バイブルの語る道徳を真正面から批判しつつ、それとはまったく異なる道徳を樹立するための基盤を探っている。バイブルの語る道徳にたいするニーチェの論評を見てみよう。

道徳の根源

バイブルの語る神は、モーセに「私はある。私はあるという者だ」⁽⁶⁸⁾と語りかける神であり、イザヤをして「死を永久に滅ぼしてくださる」⁽⁶⁹⁾と語らせる神である。また、望む者には誰にでも「永遠の命」⁽⁷⁰⁾を得ることができるようにとの手だてをとのえてくれる神である。それゆえ、バイブルの語る神は死よりも強い。バイブルを神の啓示と捉える信仰の人々にとって、神は決して死に屈することのない存在である。だが、ニーチェによれば、バイブルの語る神もまた人間が造った一つの観念ではない。人間が神の被造物なのではなく、逆に、神が人間の被造物、人間の思考と意志の産物であり、バイブルもまた、神が人間を用いて自己自身を啓示した書物ではなく、人間の独創に由来する一つの作品であるとニーチェは考えている。それゆえ、彼が神の死に言及するとき、神の死とは、バイブルに記された神の観念が、信仰者を自認する人々のあいだでさえ、その日々の生活を構成する無限に多様な実践を統御し導く唯一にして最強の動因であることをやめてしまっているという事態のことにほかならない。したがって、神の死という出来事の進行を指摘するニーチェも、「生ける神」⁽⁷¹⁾へのたちかえりを勧めるバイブルの知恵も、その信仰が「死んだもの」⁽⁷²⁾となっっている名ばかりの信仰者とともに批判

的にかかわるとはいえ、決して両者が合致することはない。「この神は生ける神、世々にいまし、その主権は滅びることなく、その支配は永遠」⁽⁷³⁾と語り神の永遠の存在とその神に由来する永遠の道徳を説くバイブルの知恵と、バイブルの語る神もバイブルの語る道徳も人間の思考と意志の産物にすぎないと考えるニーチェのあいだに、一致は生じえない。

「道徳的現象などというものはまったく存在せず、あるのはただ、現象の道徳的解釈だけだ」⁽⁷⁴⁾とニーチェは言う。この考え方からすれば、バイブルの語る善悪も、諸現象にたいする一定の解釈、あるいはさらに言うならその解釈を導く一定の意志から生じたものだということになる。善とか悪とか称されるものも、そこから解釈を取り去ってそれ自体として眺めてみれば、いかなる価値も意味も所有しない。バイブルの語る善悪とは、それ自体としてはうつろな現象を、神の掟にたいする服従ないし反逆と解釈する意志より生じた意味なのだ、とニーチェは考える。そして彼は、バイブルの語る道徳を支える意味連関を解体し、一つの新しい道徳を樹立するための基盤を固めようとしている。つまり、一方で、バイブルの語る道徳への批判を、その道徳を造り上げた意志への批判として展開すると同時に、他方では、そのような意志とは類をまったく異にする別様の意志とこの意志が造る道徳の概略を提示しているのである。

ニーチェは、道徳には「二つの基本タイプ」、すなわち「主人の道徳」と「奴隷の道徳」⁽⁷⁵⁾があると言う。前者は、ニーチェが「騎士的・貴族的な評価様式」と呼ぶ仕方で価値判断する意志が造る道徳で、後者は、ニーチェが「僧侶的な評価様式」と呼ぶ仕方で価値判断する意志が造る道徳である。ニーチェによれば、高貴ですぐれた力強い人間、すなわち魂の高揚した誇らしい状態にある人間は、自

己自身の充実した力、実在性、誠実さ、健康、富などを意識し、「勝ち誇った自己肯定」⁽⁷⁸⁾からまず自己自身のことを〈よい〉と呼ぶ。「われら高貴なる者、われらよき者、われら美しき者、われら幸福なる者！」⁽⁷⁹⁾というわけだ。次いで、そのような自分たちの状態とは反対の状態にある人々、つまり貧弱で無力な人々、影の薄い人々、臆病な者、こせこせした者、目さきの利益ばかり考える者、取り柄のない普通の人々を「距離のバトス」⁽⁸⁰⁾によって自己自身からへだてて〈劣悪〉と呼ぶ。こうして生じる〈よい―劣悪〉という価値区別が「主人の道德」の基礎に存している。すなわち、私は〈よい〉、そして私のような彼らは〈劣悪〉だという評価様式が「主人の道德」を支えていると言っているのである。この評価様式の対極に位置づけられるのが、「僧侶的な評価様式」である。これは、高貴ですぐれた力強い人々にたいする無力で劣った普通の人々の側からの「反感」⁽⁸¹⁾から生じる評価様式である。ニーチェは、そのような「反感」を心中に燃えたぎらせるもつとも典型的な種類の人間として僧侶を念頭に置き、次のように述べている。「僧侶らは、周知のごとく、最悪の敵である——だが、なぜだろう？ 彼らが最無力者だからだ。彼らにあつては、この無力から憎悪が成長し、やがてそれが奇怪にして不気味なものとなり、もつとも精神的でもつとも有毒なものになる。世界史における巨大な憎悪者は常に僧侶であつたし、またもつとも才気に富んだ憎悪者も常に僧侶であつた」⁽⁸²⁾。さらに、そのような「陰険極まる僧侶的復讐心」に満ちた民族、ユダヤ人こそが、「貴族的な価値方程式（よい⇨高貴な⇨力強い⇨美しい⇨幸福な……）」の逆転を敢行し、「主人の道德」とは別の道德、つまり「奴隷の道德」を造り上げたと述べている。すなわち、実際の行為による反発のでない無力で劣った普通の人間の抱く「反感」が、内燃する憎悪に

もとづく「想像上の復讐」⁽⁸³⁾において、高貴ですぐれた力強い人々を頭から否定しようとするとき、その「反感」が、〈よい―劣悪〉という価値区別とは別の価値区別、〈邪悪―よい〉という価値区別を生ぜしめ、これが「奴隷の道德」を造り上げるに至つたと言ふのだ。この価値区別を定式化すれば、「惨めなる者のみがよき者である。貧しき者、無力なる者、低き者のみがよき者である。悩める者、乏しき者、病める者、醜き者のみがひとり敬虔な者、神を敬う者であつて、彼らの身のみ淨福がある。——これに反し、汝ら高貴にして権勢ある者ども、汝らは永却に邪悪なるもの、残忍なる者、……神を無みする者である。汝らはまた永遠に救われざる者、呪われたる者、罰せられたる者であるだろう！」⁽⁸⁵⁾となる。「主人の道德」は、自己を肯定し自己を愛する人間がまず第一に「自発的に」自己自身について〈よい〉という概念を構想し、次いで自分とは異なる種類の人間を「一種の憐憫、斟酌、容赦」⁽⁸⁷⁾の思いを混じえて〈劣悪〉と呼ぶときに芽ばえるが、「奴隷の道德」の場合は逆である。「奴隷の道德」は、自己と対立する「外のもの」、「他のもの」、「自己でないもの」の存在をまず前提し、その価値を否定するときにはじまる。すなわち、彼らは〈邪悪〉だ、そして彼らのようでない私は〈よい〉という評価様式が「奴隷の道德」を支えているのである。それゆえ、「主人の道德」を造る価値判断は「自発的に」なされる肯定にはじまるのにたいし、「奴隷の道德」を造る価値判断の活動は「根本的に反動であり」⁽⁸⁸⁾否定にはじまる。「抑圧された者、圧迫された者、悩める者、自由でない者、自分自身に確信のもてない者、疲れた者」⁽⁸⁹⁾のまなざし、「反感の毒をふくんだまなざし」⁽⁹⁰⁾が、「主人の道德」の意味で〈よい〉人、高貴ですぐれた力強い人を〈邪悪〉とみなし、これと比較すれば〈劣悪〉な「うらなりの蒼白い対照像」⁽⁹¹⁾でしか

い自分たちのことを「よい」とみなすこと、ここに「奴隷の道徳」の根源がある。そして、このような「奴隷の道徳」の典型を、ニーチェは、バイブルの語る道徳、神への愛の掟と隣人愛の掟を根底にもつバイブルの愛の思想に見ているのである。ニーチェは言う……。「復讐と憎悪のあの樹の幹から、ユダヤ人的な憎悪——もつとも深くもつとも崇高な憎悪、すなわち理想を創造し価値を改造する憎悪、かつて地上にその比を見なかったような憎悪——のあの樹の幹から、同じく比類を絶するあるものが、一つの新しい愛が、あらゆる種類の愛のうちもつとも深くもつとも崇高な愛が成長してきた。……とはいえ、その愛はあの復讐欲の真の否定として、ユダヤ的な憎悪の反対物として生い立ったものではあるまいかなどとは、決して思わないでもらいたい！ いや、その逆こそが真理なのだ！ この愛は、あの憎悪の樹の幹から、その樹冠として成長してきたのだ」と。

バイブルの語る道徳、その愛の思想が、高貴ですぐれた力強い人々にたいする無力で劣った普通の人々の「反感」、「憎悪」から誕生したのであるとすれば、その道徳、その愛の思想においては、ありとあらゆる価値と意味の変換、変造、逆転がおこなわれていることである。ニーチェは、バイブルの語る道徳、その愛の思想を造り上げた人々を「弱さを嘘でごまかして功績に変えようとする」者、あるいは「贗金造り」と評している。彼らによって、報復しない無力は善良さ、臆病な下劣さは謙虚、力を尽くそうとしない事勿主義や待つしか能のないことは忍耐に変えられる。また、彼らは自分たちが望んでいるものを報復とは呼ばず正義の勝利と呼び、その同胞を、憎悪における同胞とは呼ばず愛における同胞と呼ぶ。等々。つまりニーチェは、彼らの道徳には、嘘や偽善や自己欺瞞が満ちあふ

れていると言うのである。同時代の名ばかりの信仰者たちにたいするニーチェの批判は、すでに見た。だが、自己欺瞞に陥っているのはニーチェの同時代人だけではない。バイブルの語る道徳、その愛の思想が「飽くことのない憎悪の醸造釜」から誕生したのであれば、むしろ、バイブルの語る道徳の根底に愛があると真剣に考えて疑うことのない信仰の人々、あるいはさらにバイブルの語る道徳、その愛の思想を造り上げた人々こそ、はるかに深く自己欺瞞に陥っているということになる。すでに見たように、ニーチェの同時代人は、たしかに、バイブルの思想をバイブルが語る意味とは似ても似つかぬものへと変質させているのであるが、それでも彼らは、ニーチェによれば、嘘や偽善や自己欺瞞から成る思想をもって生活するという点において、バイブルの思想を造り上げた人々やその思想にみずからの生活全体の導きを求める信仰の人々と同類として一括されるのである。すなわちニーチェは、みずからの同時代人である名ばかりの信仰者たちを、「偽り者」を父とするその末裔と見ているのである。それゆえ、同時代人の言う隣人愛にたいするニーチェの批判は、バイブルの語る隣人愛の掟の思想を擁護する立場からなされているのではない。ニーチェは、その隣人愛批判において、同時代人にバイブルの知恵の引き立て役を演じさせようとしているのではない。彼の隣人愛批判は、同時代人の言う隣人愛にたいする批判を越えて、彼らがすでにそこから遠く離脱してしまっているとはいえ依然としてそこからの由来を保持している源泉の思想、つまりバイブルの語る隣人愛の掟の思想にまでおよぶ。つまり、同時代人の言う隣人愛にたいするニーチェの批判の背景には、バイブルの語る道徳、その愛の思想の誕生についての彼の独特の解釈が存しているのである。ダンテは『神曲』地獄篇第三歌の冒頭の詩句で、地獄の門の上

に「我を造りしも永遠の愛なり」という恐るべき銘文を掲げているが、このダンテの創意に匹敵する創意をもって、ニーチェは、キリスト教の言うパラダイスとその永遠の浄福に至る門の上に「我を造りしも永遠の憎悪なり」という銘文を掲げることが提唱している——しかも、「虚偽に至る門の上に真理を掲げることが許されるとすれば！」と語りつつ。⁽⁹⁾

ニーチェは、バイブルの語る道德、その基礎に存する善悪の価値区別、すなわち〈邪悪—よい〉という価値区別、さらにこの価値区別を生ぜしめた意志を、右のように批判すると同時に、それらとはまったく異なる道德、自己を愛し肯定する者の高貴な意志とこの意志が生ぜしめる〈よい—劣悪〉という価値区別にもとづく道德を樹立しようとしている。高貴な者、すぐれた者、力強い者を〈邪悪〉と呼び、無力な者、劣った者、普通の者を〈よい〉と呼ぶ道德が「勝利をおさめた」ということ、ニーチェは、これこそが「ヨーロッパの人間の矮小化と均一化」⁽¹⁰⁾をもたらし、「ニヒリズムス」——もはや人間に恐怖も愛も畏敬も抱くことができずただ倦怠を感じるばかりだという状況——を招き寄せたと考えている。〈邪悪—よい〉という価値区別が支配する領域においては、「ニヒリズムス」はますます深くなる。「事態はいよいよ下へ下へと落ちてゆき、より稀薄なもの、より温良なもの、より利口なもの、より気楽なもの、より凡庸なもの、……よりキリスト教的なものへと落ちてゆく」⁽¹¹⁾。そこでは、「特権への勇氣、支配権への勇氣、自己ならびに自己の同類を前にしての廉恥心への勇氣、——つまり距離のバトスへの勇氣」⁽¹²⁾を具えた人間が育たないからである。「文化のあらゆる向上とあらゆる成長にとっての前提」であるとニーチェの考える「人間と人間とのあいだのあらゆる畏敬と距離の感情」⁽¹³⁾が育たないからであ

る。ニーチェは、ますます深くなる「ニヒリズムス」の状況を克服するために、バイブルの語る善悪の彼岸、すなわち〈邪悪—よい〉という価値区別の彼岸に立って新しい道德を樹立しようとしているのである。まず、自己への愛を回復し、次いで恐怖や愛や畏敬や希望に値する人間を回復しようとしているのである。⁽¹⁴⁾

むすび

隣人愛批判をおこなうニーチェの思考の根底には、バイブルの語る隣人愛の掟を、高貴ですぐれた力強い人間にたいする無力で劣った普通の人々の側からの「反感」と「憎悪」の産物として捉える解釈があった。さらに、隣人愛の掟に含意された平等の思想、つまり自己と他者のうちにともに神のかたちという価値が刻印されているという思想が、人間と人間とのあいだの裂け目を締め、自己自身であろうとし自己を際立たせようとする意志を抑圧し、「すべての強い時代に特有」とニーチェの考える「距離のバトス」⁽¹⁵⁾の成育を阻み、人間を劣悪化してきたし今後さらに急速に劣悪化してゆくであろうという歴史意識、危機意識があった。だが、ニーチェは、「奴隷の道德」が「主人の道德」との闘争において「勝利をおさめた」と主張するときにも、彼自身、その「奴隷の道德」を踏み越えた彼岸に新しい一つの「主人の道德」を樹立しようとするときにも、いずれの場合においても、高貴ですぐれた力強い人間と無力で劣った普通の人間の区別があるという前提のもとで思考している。もちろんこの区別自体が〈よい—劣悪〉という価値区別に拠るものであり、この価値区別は高貴ですぐれた力強い人間の意志が生ぜしめるものであるから、ニーチェはみずから一人の高貴ですぐれた力強い人間と

して思考すると自認していることになる。しかし、バイブルなら、それら二種の人間の区別のさらに根底に同一の神を置き、いずれの種類の人間にもともに神のかたちが宿り、それゆえそれら二種の人間は神の前においては平等なのだと語るであろう。だがニーチェは、バイブルがおこなうように二種の人間の区別の根底に同一の神を置き人間の平等を語る思考こそ、無力で劣った普通の人間の思考の特質だと言うのである。そして、人間のあいだには位階の差が存在するという前提のもとに、その位階の差を肯定し享受する側の人間の自己愛のうえに、新しい道徳を構築しようとしているのである。しかし、バイブルは、ニーチェの前提する位階の差にかかわらずなく、強い者であれ弱い者であれ誰であれ、そこに存在しているという事実あるいは存在を贈られてそこにあるという生存の事実こそが万人に共通の根源的な強さなのだと語り、そのような根源的な強さを無償で付与し保持させる神への感謝と愛のうちに道徳の基盤を見る。それゆえ、バイブルの知恵の立場からすれば、道徳の誕生について語るニーチェは、道徳の基盤を究めずに道徳の基盤について語る者、あるいはニーチェが同時代人を批判する際ツァラトゥストラに語らせた言葉を用いるなら「自分の無知に背いて語る者」だということになるのだろう。『エプ記』には、「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて、神の経綸を暗くするとは」と記されている。ニーチェは、位階の差を享受する人間の自己愛のさらにその基盤にまでさかのぼるバイブルの思想を虚偽、しかも人間を劣悪化する虚偽、ヨーロッパ文明とその息吹を吐きかけられた大地を衰弱させ荒廃させる危険な虚偽と見なしていた。しかし、彼のそのような解釈・攻撃に少しもひるまずバイブルの知恵の導きにみずからの生活を全面的に委ねようとする信仰の人々がわずかとはいえ小さな群をなしておそ

らく存在するのだ。彼らは、バイブルに記された次の呼びかけを聴き入れ、この呼びかけに心を尽くし魂を尽くし力を尽くしこたえ応じようとするにちがいない。「わが子よ、知恵を得て私の心を楽しませよ。そうすれば、私を嘲る者に言葉を返すことができる」。

注

バイブルからの引用ならびにバイブルへの参照は、共同訳聖書実行委員会、「聖書 新共同訳——旧約聖書統編つき」、日本聖書協会、一九八七年、による。当該箇所は、バイブルを構成する各書のうちの当該の書物の名称とその書物の章節を記し明示する。なお、引用・参照に際し、いくつか表記（仮名と漢字）を改め、地の文との統一をはかった。

- (1) 『マタイによる福音書』二二の四〇。
- (2) 『マルコによる福音書』一二の三一。
- (3) 『ツァラトゥストラはこのように語った』の略称。以下、『ツァラトゥストラ』の引用・参照は、Kroners Taschenausgabe Band 75, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1969 (Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, 1883-1885) を用い、その書物の頁数や、Zarathustra の後に添えて当該箇所を示す。
- (4) Zarathustra, S. 64-66 に所収。
- (5) Zarathustra, S. 64.
- (6) Zarathustra, S. 81.
- (7) Kroners Taschenausgabe Band 76, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1976 [Zarathustra, S. 76-77], S. 202 (Friedrich Nietzsche, Jenseits von Gut und Böse, 1886 [Zarathustra, S. 260]).
- (8) ibid..
- (9) vgl. Zarathustra, S. 9-10, S. 131, S. 295.
- (10) Zarathustra, S. 11. vgl. Zarathustra, S. 14, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.
- (11) Zarathustra, S. 11.
- (12) ibid..
- (13) Zarathustra, S. 9-10.

- (14) vgl. Zarathustra, S. 221. 「*わたし*」に「私が愛するのは、わが身を温存しよう」とない人々だ」とある。 vgl. auch Zarathustra, S. 12.
- (15) vgl. Zarathustra, S. 14. 「*人はやはり隣人を愛している*。隣人にわが身をこすりつける。温暖が必要だからだ」とある。暖をとる方便としての隣人愛。
- (16) 同時代人の実践を無私なる愛からの実践と対比して、ツァラトゥストラは次のように説教する。「あなたがたがこう言う時である。『私の同情が何だと言うのだ！ 同情とは、人間を愛する者がはりつけにされる十字架ではないのか？ だが私の同情は、私が十字架にかけない』」(Zarathustra, S. 10)。
- (17) Zarathustra, S. 64-65. また、『善悪の彼岸』一四八節には次のように記されている。「隣人を誘惑し、よい意見を抱かせ、その後で隣人のこの意見を信じて帰依する。この手管にかけて女どもにおよぶものが誰かいるか？」(K. T. 76, S. 88 (G. B. §149)).
- (18) vgl. K. T. 76, S. 59 (G. B. §46). そしてニーチェは「キリスト教のすべての術語にたいして鈍感になってしまった近代の人間」に言及している。しかし、鈍感なのは近代や現代の人間だけではない。イエスの時代においても、隣人あるいは隣人愛という語の意味にたいする鈍感さが、律法の専門家たちのあいだにさえ広まっていたと推測される(『ルカによる福音書』一〇の二五-三七、に記された親切なサマリヤ人の記事を参照せよ)。
- (19) 『レベ記』一九の一八。なお、『レベ記』一九の三四、『申命記』一〇の一九、を参照せよ。
- (20) 『マタイによる福音書』一二の三七-三九。なお、『マルコによる福音書』一二の二九-三一、『ルカによる福音書』一〇の二七、を参照せよ。
- (21) 『ローマの信徒への手紙』一二の八一-九〇。
- (22) 『マタイによる福音書』一九の一九、『ガラテヤの信徒への手紙』五の一四、『ヤコブの手紙』二の八、等を参照せよ。
- (23) 『エフェソの信徒への手紙』五の二八。
- (24) 『ヤコブの手紙』二の九。
- (25) 『ペタイによる福音書』七の二二。
- (26) vgl. Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 235-236 (Friedrich Nietzsche, Der Antichrist, §38), 参照せよ。

照箇所でニーチェは、次のように述べている。「そもそもキリスト教は誰を否定するのであろうか？ 何を『世俗』と呼んでいるのか？ 人が兵士であること、人が裁判官であること、人が愛国者であること、そのことをではないか。人が自衛すること、人が自分の名誉に固執すること、人が自分の利益を欲すること、人が高慢であること、そのことをではないか。……今日では、すべての瞬間のすべての実践、すべての本能、現に実行されるすべての価値評価が、ことごとく反キリスト教的である。にもかかわらず、近代の人間は依然としてキリスト者と称して恥じない。近代の人間とは何とないんちきな奇形児であることかと言わざるを得ないであろう！ このいんちきな奇形児にたいして、ニーチェもバイブルとともに批判的にかかわる。だが、そのかわり方に差がある。バイブルなら、このような近代の人間にキリスト者らしく生活することを勧めるが、ニーチェは、彼らにキリスト者であることをやめよと言う。「今日キリスト者であるということは恥知らずであるということだ。そしてここに私の嘔吐がはじまる」とニーチェは言う。

- (27) 『創世記』一の一三。また、『テモテへの手紙』一四の四、を参照せよ。
- (28) 『創世記』三の一六、を参照せよ。また、『ヨハネの黙示録』一二の九、二〇の二、も参照せよ。
- (29) 『詩編』一九の二五。
- (30) 『ローマの信徒への手紙』一の二〇。さらに、外典『知恵の書』一三の一、四一五、を参照せよ。ここに、「神を知らない人々はみな、生来むなし。彼らは目に見えぬよいものを通して、存在そのものである方を知ることができず、作品を前にしても作者を知るに至らなかった。……もし宇宙の力と働きに心を打たれたなら、天地を造られた方がどれほど力強い方であるか、それらを通して知るべきだったのだ。造られたものの偉大さと美しさから推し測り、それらを造った方を認めるはずなのだから」とある。
- (31) 『創世記』一の二六-二七、五の一、『ヤコブの手紙』三の九。また、『使徒言行録』一七の二九、『コリントの信徒への手紙』一の一七、七、も参照せよ。
- (32) 贈り物とはいえ、自己自身の全体が神からの贈り物であるのだから、根本的に言うなら、すでに受け手が存在しているところに贈ら

れてくる贈り物ではなく、受け手のない贈り物、あるいはそれ自身が受け手である贈り物だということになる。

- (33) 『コリントの信徒への手紙 一』一〇の三一、を参照せよ。『コリントの信徒への手紙 一』一〇の三一、何をすることにしても、すべて神の栄光をあらわすためにしない」と記されている。また、『マタイによる福音書』五の二六、等も参照せよ。

- (34) 『コリントの信徒への手紙 一』二三の四一七。

- (35) 『エフェソの信徒への手紙』五の二九。

- (36) 「わが身」への愛、あるいは「自分の体」への愛とは、「自己の全体にたいする愛を意味する。世人によれば、サルクスもソーマも、一個の人間全体を表現するものであり、ともに尊重すべきものである。『聖書思想事典 VOCABULAIRE DE THÉOLOGIE BIBLIQUE』三省堂、一九七三年、二二六頁「体」の項、「旧約新約聖書大事典」教文館、一九八九年、三三〇頁「体」の項、を参照せよ。なお先の引用箇所——注(23)——を参照せよ。

- (37) 『ローマの信徒への手紙』一の一三三、を参照せよ。

- (38) Zaruustra, S. 184-190 に所収。

- (39) Zaruustra, S. 189-190。

- (40) Zaruustra, S. 213-214。

- (41) 先の引用箇所——注(40)——を参照せよ。

- (42) vgl. Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 187-188 (Friedrich Nietzsche, Die frühliche Wissenschaft („la gaya scienza“), 1882, §285). 『コリントの信徒への手紙』一の一三三、を参照せよ。

- (43) Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 140-141 (Friedrich Nietzsche, Die frühliche Wissenschaft („la gaya scienza“), 1882, §125)。

- (44) ibid.

- (45) 『コリントの信徒への手紙 一』一六の二六。なお、『出エジプト記』二九の四五、『レビ記』二六の二二、『エゼキエル書』二七の二六、二八、『ヨハネによる福音書』二の一九、二二、等を参照せよ。

- (46) Zaruustra, S. 213。

- (47) Zaruustra, S. 65。

- (48) 『ローマの信徒への手紙』一三の一。

- (49) 『ヤコブの手紙』四の一〇、『ペテロの手紙 一』五の五一六、等を参照せよ。

- (50) Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 85 (Friedrich Nietzsche, Götzen-Dämmerung, 1889, Sprüche und Reile, §31)。

- (51) 『ローマの信徒への手紙』一三の二七。

- (52) Zaruustra, S. 28。

- (53) 『ヤコブの手紙』四の四。また、『ガラテヤの信徒への手紙』一の一〇、『ヨハネの手紙 一』二の二五、等も参照せよ。

- (54) 『ヨハネの手紙 一』五の三、を参照せよ。

- (55) Zaruustra, S. 28。

- (56) 『ローマの信徒への手紙』一三の一。

- (57) Zaruustra, S. 225。

- (58) Zaruustra, S. 62-63。『コリントの信徒への手紙』一の一三三、を参照せよ。

- (59) vgl. Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 181-182 (Friedrich Nietzsche, Die frühliche Wissenschaft („la gaya scienza“), 1882, §277). 本節の「人間的性質」の思想の「威力」と「危険な誘惑」に言及しつつ、その思想を「しりぞけよう」としている。

- (60) Zarathustra, S. 66.
- (61) 註 (55) を参照せよ。vgl. auch Immanuel Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, 1785, Kants Werke Akademie-Textausgabe Band IV, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1968, S. 434–435. ノリツカニナニチノ「価値あるもの」の「相対的価値」を無限に越えた価値のあり「尊敬」のよう論じよう。
- (62) Zarathustra, S. 92.
- (63) Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 235 (Friedrich Nietzsche, Die frühe Wissenschaft („la gaya scienza“), Fünftes Buch, 1887, §343).
- (64) *ibid.*
- (65) *ibid.*
- (66) Zarathustra, S. 190. 「預言者の人間」のようニチノ Kröners Taschenausgabe Band 74, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965, S. 209 (Friedrich Nietzsche, Die frühe Wissenschaft („la gaya scienza“), 1882, §316) を参照せよ。
- (67) 『使徒言行録』一七の二一。
- (68) 『出エジプト記』三の二四。
- (69) 『イザヤ書』二五の八。
- (70) 『モントネによる福音書』一七の三三『モントネの黙示録』二二の二七等を参照せよ。
- (71) 『ロレンツの信徒の手紙』一五の二六『モントネの黙示録』二〇の二四、二二の二四等を参照せよ。
- (72) 『申命記』五の二六、等。
- (73) 『ヤコブの手紙』二の二七。
- (74) 『タリエン書』六の二二。
- (75) K. T. 76, S. 83 (G. B., §108). vgl. K. T. 76, S. 373 (G. M., Dritte Abhandlung, §16). ノリツカニナニチノ「人間の〈罪深き〉もの」は何らかの事実などではなく、むしろ一つの事実の解釈にすぎない。すなわち生理的不調の解釈にすぎない」と述べている。
- (76) K. T. 76, S. 200 (G. B., §260).
- (77) K. T. 76, S. 258–259 (G. M., Erste Abhandlung, §7).
- (78) K. T. 76, S. 263 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (79) K. T. 76, S. 264 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (80) K. T. 76, S. 197 (G. B., §257). vgl. K. T. 76, S. 254–255 (G. M., Erste Abhandlung, §5).
- (81) K. T. 76, S. 263 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (82) K. T. 76, S. 259 (G. M., Erste Abhandlung, §7).
- (83) K. T. 76, S. 259–260 (G. M., Erste Abhandlung, §7).
- (84) K. T. 76, S. 263 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (85) K. T. 76, S. 260 (G. M., Erste Abhandlung, §7).
- (86) K. T. 76, S. 267 (G. M., Erste Abhandlung, §11).
- (87) K. T. 76, S. 264 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (88) K. T. 76, S. 263 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (89) K. T. 76, S. 203 (G. B., §260).
- (90) K. T. 76, S. 267 (G. M., Erste Abhandlung, §11).
- (91) K. T. 76, S. 263 (G. M., Erste Abhandlung, §10).
- (92) K. T. 76, S. 260–261 (G. M., Erste Abhandlung, §8).
- (93) K. T. 76, S. 274 (G. M., Erste Abhandlung, §14).
- (94) K. T. 76, S. 275 (G. M., Erste Abhandlung, §14).
- (95) vgl. K. T. 76, S. 274–275 (G. M., Erste Abhandlung, §14).
- (96) vgl. K. T. 76, S. 276 (G. M., Erste Abhandlung, §14).
- (97) K. T. 76, S. 267 (G. M., Erste Abhandlung, §11).
- (98) 『モントネによる福音書』八の四四、を参照せよ。
- (99) K. T. 76, S. 277 (G. M., Erste Abhandlung, §15).
- (100) K. T. 76, S. 260 (G. M., Erste Abhandlung, §7).
- (101) K. T. 76, S. 271 (G. M., Erste Abhandlung, §12).
- (102) *ibid.*
- (103) *ibid.*, vgl. K. T. 76, S. 74–76 (G. B., §62). ノリツカニナニチノ「モントネ人種の劣等性」の理由のよう述べている。
- (104) Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 244 (Friedrich Nietzsche, Der Antichrist, §43).
- (105) *ibid.*
- (106) vgl. K. T. 76, S. 89 (G. B., §153). ノリツカニ「愛からなるもの」は常に善悪の彼岸で起る」と記されている。(「邪悪」のよう「価値区別の彼岸」のよう意味がある。
- (107) Kröners Taschenausgabe Band 77, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1964, S. 158 (Friedrich Nietzsche, Götzen-Dämmerung, 1889, Streif-

- züge eines Unzeitgemäßen. §37).
(108) 先の引用箇所——注(17)——を参照せよ。
(109) 『ヨブ記』三八の二。
(110) 『申命記』六の五、を参照せよ。
(111) 『箴言』二七の二一。